

清らかな海こそ私たちの故郷。  
自分たちの手で海を守りましょう。

監修 水産庁  
社団法人 日本水産資源保護協会



私たち漁業者にとっては、海は日々の糧を供給してくれる、いわば私たちの生活の場所そのものです。誰よりも海をよく知っている私たちこそ、その重要性を認識していると自負していいのではないのでしょうか。

●**私たちは環境問題の先駆者です。**現在、環境問題がさかんに論議されていますが、海の問題の重大さに気づいたのは、私たちの仲間でした。私たちの運動が世論をかきたて、国会や政府を動かして、現在の公害関係法令を成立させたのです。しかも、沿岸漁業に従事する私たちの仲間は、海の清掃に日夜おしめない努力をつづけています。

●**私たちもまた、公害発生原因者となる可能性もっています。**日本には「水に流す」という表現があります。不要なものや、汚いものを川や海に流す習慣から生まれた言葉でしょうか。しかし、現在の日本のように狭い国土に多くの人が住んでいると、一人一人の捨てたものが、積み重ねて大きな公害を発生させることになるのです。私たちの海の生活をふり返ってみますと、私たちもまた、公害の発生原因の一端を担っていることに気づくはずで、空になったビンやカン、ビニール袋、ひもやバンドをどのように始末しているのでしょうか。海に捨てられた廃棄物は、海の底に堆積したり、海上を漂って海岸にたどりつきます。島崎藤村に「椰子の実」という有名な詩があります。熱帯の地から日本にはるばるとやってきた椰子の実、これが一升ビンやゴミ袋だったら、それを見た人は何を思うのでしょうか。

●**悲しい事実は、私たちの仲間の行為でしょうか。**最近、外国から次のような抗議がひんぱんに寄せられています。ベーリング海やオホーツク海の沿岸に、ビン類やプラスチック容器、さらには包装用ポリプロピレンバンド、漁網などが流れつき、海岸の美観をそこねているという苦情です。さらに、古網やポリプロピレンバンドを頭にかぶった奇形のおとせいが増えているという抗議です。これらについては、日本の漁船が捨てたという証拠は何もありません。政府もそのように主張しています。しかし、それら廃棄物の中には日本製のものも多く含まれているという事実から、私たちの仲間が捨てたという可能性も否定することができないのです。



●**古網の海中投棄はやめたいものです。**古網の処分は、私たち漁業者にとって大きな悩みのひとつです。手っとり早い処分の方法は、海の中に捨てることでした。従来の綿網なら、やがて朽ち果て自然に還るという過程をたどりました。しかし、現在の合成繊維の網はいつまでも海の底に漂って、魚族の再生産に悪影響を与えるとされています。古網を海中へ捨てることは、自分で自分の首をしめることにつながります。古網の海中投棄は、海洋汚染防止法によりかたく禁止されています。広い海の上では、これを監視することは不可能です。私たち一人一人の自覚がすべてです。古網やくず網を海中に捨てない、このことをみんなで誓い合いたいものです。

●**「腐らないもの」も海の大敵です。**漁網だけではなく、びん類、プラスチック容器、ビニール袋、包装用ポリプロピレンバンドといった腐らないものは、絶対に海へ捨てないようにしましょう。みそ樽や酒樽などの腐るものでも、そのまま海岸に流れつくことがありますから、やはり捨てないでください。現在、とくに問題になっているのは、ポリプロピレンバンドを首に巻きつけたおとせいです。成長するにつれて、バンドが首にくい込み、奇形のおとせいになってしまうのです。このような不幸なおとせいをつくらないためにも、私たちは海への投棄にできる限りの配慮をはらいたいものです。

●**おとせいが網などにひっかかった場合は必ず逃がしてやりましょう。**おとせいが、網やその他の漁具にひっかかってきた場合には、その生死にかかわらず、法律により放さなければならないことになっています。ただ、おとせいは、体が柔軟なうえにかみつく習性がありますから、慎重な処置が必要です。まず、おとせいの頭部を金網(比較的太い針金でつくられた網目の小さいものか、これに代れる網目様のもの)で、しっかりと取り押えて行動を制止します。ここで注意しなければならないことは、おとせいの首の力の強さです。とくにふり向く力が強いので、後方からの作業は前方からと同じように注意しなければなりません。そして体にかかった網を、ナイフかハサミで切断し、さらにこれを取り除きます。網が完全に取り払われたことを確認してから海に放してやってください。

●**清らかな海は、私たちの手で守りたいものです。**私たちの先輩は、公害問題の先駆者でした。先輩たちの努力は、私たちの誇りです。私たちこそ、海を守る旗手にならなければなりません。公害防止は、一人一人がこころがけることによって初めて達成されます。いいかえるなら、一人一人の不注意が公害を発生させるのです。私たちは、私たちの手で清らかな海を守りぬきましょう。